

「児童研究」誌における童謡蒐集（五）

國 生 雅 子

本稿は「児童研究」誌における童謡蒐集（一）（「福岡大学日本

語日本文学」十六号 平成18・12）、同（二）（「福岡大学研究部論
集」A人文科学編九卷一号 平成21・5）、同（三）（「福岡大学日本
語日本文学」二十四号（平成27・1）、同（四）（「福岡大学日本語日
本文学」二十八号（平成31・1）の続稿として、同誌に掲載された
歌謡に関する記事を紹介するものである。「児童研究」誌第四卷七号
（明治35年11月）から第五卷九号（明治35年11月）に認められる歌謡
関係の記事を取り扱い、続きは別稿にゆだねることとする。

前稿で示したように、第四卷は、二号（明治34年6月）の理学博
士渡瀬庄三郎「蛭に関する伝説童謡の研究」を契機として「児童研
究」誌史上最も多く多くの伝承童謡紹介記事が掲載された。「蛭」という
テーマを示された全国の読者がそれに応え、俚歌童謡、及び遊戯、
迷信等の情報を寄せたのである。しかし、蛭の季節が過ぎると共に
その熱は冷め、六号（同年10月）では新たに蜻蛉、蝙蝠を捕らえる
際の歌を募集はしたが、ムーブメントを起こすには至らなかった。

だが本稿で取り上げる約一年間は、読者に喚起された伝承童謡へ
の関心が持続されており、越後の平賀泰三郎を筆頭に、継続的な投
稿が見られる。

（凡例）

- ・「童謡」に限定せず、一般の歌謡も採ることとする。
- ・明らかに近年、明治になってから歌われ始めたものと考えられ
るものも、「児童研究」誌が目指した児童の歌の実態観察という
視点から、江戸、もしくはそれ以前よりの伝承歌謡と区別せず
取り上げる。
- ・漢字は現行の平易な字体に改めた。仮名遣いは原文のままとし、
誤植と思われる箇所も改めてはいないが、特に「ママ」とルビ
を付していない。歌謡の性格上方言を用いたものが多く、誤植
か否かを判じがたい場合が多いためである。原文のルビ、傍点
等は残し、変体仮名は通常の字体に改めた。なお、読みやすく
するために空白部を補った箇所は■で示した。
- ・ある地方で歌われる歌謡を紹介した記事以外にも、歌謡に関す
る記事は全て取り上げることとする。
- ・主に遊戯法、方言、俚諺を紹介した文献であつても、歌謡を一
作でも含むものは採った。
- ・短歌、俳句、唱歌、創作、外国の子供の歌に関する記事は除外
した。

- ・記事の掲載欄名は、題名の前に「」を付して示した。
- ・筆者名が記載されている場合は、題名の後に（）を付して示した。
- ・題名や署名が本文と目次とで異なる場合、本文に従った。
- ・注は各記事の最後に「＊」を付して示した。

明治34・11（4巻7号）

「研究法」童謡につきての取調

（山形 安日 長雄）

遊戯の主眼とする所は快楽の中に身体の発達を促し、不知不識の間に知識を得、行徳を修めしむるにある事は今更喋々を要せざる所なり。然れども此諸点に向ひて満足を与ふる遊戯は甚少なく、殊に共同的遊戯に乏しきは常に困難を感じつゝ、ある所なり。従来家庭に行る、遊戯の教育的価値を按ずるに或る点に於ては多少瑕疵ありと雖、亦有功なる事は驚くべきものあり、されども今日余の研究せんとするは重に俗間に行はるゝ童謡につきてなり。

次点

- (1) 歌詞に猥褻野鄙なる点ある事
- (2) 事実の現時に適應せる事
- (3) 歌謡の無意味なるものある事

価値

(1) 童児の嗜好に適す——歌謡は児童の好める昔噺的なるにより、自然的嗜好に適し、自ら快楽を以て之を唱ひ、之に伴ふに遊戯を以てせるは実に巧なる遊戯法と云ふべし、

(2) 口調よき爲児童暗誦し易し——後に記せる童謡は高等三年女生五

名より聞取りしものなり。母姉の懐中にあるときより聞き覚えたるものとは云へ、之を記憶する事驚くに堪へたり。之れ口調の宜きは主なる一因なるべしと思はる。

(3) 童謡に伴ふ遊戯は殆ど共同的なり。——数人若くは数千人（註）童謡を合唱しなから巧に手を打ち、或は毬をつくを見るに巧に作れる共同的遊戯にして其の愉快面に溢るゝのみならず、同情の徳と敏捷の氣象と手腕の練習と口舌の練達とに其有功なるを認むるなり。

希望

以上の欠点と価値とを有する童謡は教育家の注意を引くこと少なきは遺憾なり仰も童謡の今日に作られしもの甚少なく、何れも昔に於て作らしものなれば之を教育的に評すれば欠点の多きは怪むに足らず。却て其遊戯の主眼たる共同的なる、手の練習を計れる、歌謡と遊戯と連結して快楽を多からしむる等其価値の多きを讃すへきなり然れども教育家の手によりて更に教育的に改訂を加へ前述の三欠点を補削せば其効今日に加倍するや疑なし教育家常に曰はく学校と家庭との連絡甚必要なりと其内容を探れば、二主要点あるか如し。一は学校の教授上管理のことを家庭に知らしめ一は入学後の児童の家庭に於ける勉学作法に関する情況を知り、共同一致して教化せんとするにあるか如し。之れ明に必要件なり。余は更に必要なる点あるを認む何ぞや。入学前の家庭の情況を取調べ入学当初の教授管理に應用すること之れなり熟児童の家庭時代を見るに全く遊戯時代にして寝ぬるより外は疾走大声或は犬を追ひ鳥を呼び決して静坐することなく又其遊戯の変転するも一挙一瞬一動一秒と云ふ有様なり。然るに入学するや直に従來の習慣を

全破し厳格なる規律の下に一進一退皆命令により三十分乃至四十分の間自由なき興味なき生活をなさ、るを得ず。此時代に於ける児童の苦痛察すべきなり。故に入学当初は宜しく家庭の生活をなさしめ漸次学校生活に慣れしむへし。之をなすには家庭遊戯を取調べ入学の際は之を課し之と同時に学校の遊戯唱歌を授け之を教材に利用し、且其教授も家庭生活に近からしめんには多少苦痛を減し得べきなり、童謡と之に伴ふ遊戯は家庭遊戯中主要なるもの、一なれば教育的に改訂し家庭に通して母姉子守等に知らしむれば家庭教育と学校教育を益するのみならず、社会教育を資益すること少からざるなり。之れ余の教育家に向ひて改訂を促す所以なり。

童謡

一、月を見れば、

お月様なんば 十三七つ まだ年ア若いぞ とのこに かくれ
て遊びだい ぱっかりぱっかりだ

二、鳶を見れば、

トービ 舞ひまれ 烏ア 太鼓打て 雀ア 笛 吹け いなこア
ちヨいと で、お肴に なりやれく

三、宿り鳥の多く飛び行くを見れば、

後の鳥ア 前に なったを 扇子一本 くれべ

四、風の吹くを望むとき、

みんみん みやま から 大風ア 吹いて来い

五、水上に張れる水を打ては美しく色を表はず故に、

祖父と祖母 寝で ゐろ よみめア 起きす火たけ

六、雁を見れば、

竿になれ鉤になれ

七、蛭狩に出てしとき

蛭来い山吹来い鯉のあたまで露くれべ

八、蝸牛をとれば角出せとて、

蝸牛^{カタツムリ} 角出せ にしや(汝) 出すとおれも出す

九、鳥を見れば、

烏々 こん烏 にシア てって(父) 何処さ いった 麴とりに

まかつた 何升 取て来た 五升 五升 取て来た んだ

らその麴は 酒に造り申した んだら其の酒は■父アす、り申した

■むんだらその犬は 皮にはぎ申した んだらその皮は 太鼓

に張り申した んだらその太鼓は 隣の児童等は 打てく

ぶさばいてしまし申しした 申しした (未完)

* 『「児童研究」誌における童謡蒐集(一)』に示した一覽で

は報告者名を「安田長雄」としていたが、正しくは「安日」

である。お詫びして訂正する。また、本記事は明らかな誤

植やルビの間違いが含まれるが、原文のままとした。

明治35・1(4巻9号)

『研究』童謡につきての取調

(山形 安日 長雄)

十、蜻蛉^{ヤシマ}を 糸にて つなき これにて 他の蜻蛉を とらんとす

るとき

やーれ やらんま これにかいやれ そちはおや(男)だし こち

はめや(女)だし そちに 行くじと すますびつつきに 吞まれ

べし

十一、仲間の泣くときに

泣きぼち けぼち けぼちに さ、れて 大泣き しぼだ

十二、人の真似をすれば

真似言こッバ 大根葉 大根一本 負へない

十三、これより 後のものは 児童を 扱ふときに 口なぐさみ子

守等の 云ふものなり

(1) 田螺々々 山さ あいべ う、だて(イヤナ) 山かな 今年の

春 行たれば 鳥で 云ふ 黒鳥に 尾の曲がり目を ちツク

もツくと つ、かれた 雨さへ降れば其のとは づんき も

んきと やめ申す

(2) 向ひの山で かや刈るは 善太郎殿か 太郎殿か 帰りに寄ッ

て 御茶まあれ お茶の香は 何々 天下一の香箱 香箱の中

に 赤い小袖三ツ三ツ 白い小袖三ツ三ツ 三ツになるわこは

何所から落ちる 寺から落ちる 何着て落ちる 袴着て落ちる

袴の色は べに色 かね金 桜の花の色だ 色だ

(3) おぼさよく そんなに赤いおべ(着物) 何所さ着て行く何所

さ 着て行く あしたは おぼめの 御祭でく お鷹「ポツ

ポ」に おさんちよろく「ピツピ」「ガラガラ」豆太鼓く

それから 御獅子も 買ふてやるく 風の吹く時アがらがら

とく

(4) 才大黒と云ふ人は 一に俵をふんまいて 二に二ツ こと笑

つて 三に盃いだだ、いて 四ツに世の中よいように 五ツに

泉のわくように 六ツに無病そくさいに 七ツに何事ないうよう

に 八ツに屋敷を買ひもとめ 九ツこくらを押し建て、 十と

宝を おさめた

(5) 向ふ通ふは 誰ア娘 おーさか酒屋のおと娘 おれが女房に

なるならば 京で五貫で笠買ふて 笠のしめ緒は から糸よ 晩

にござれや お姉さん 晩にこいとほよけれど 国の習ひで

死んだらば 茶せん茶盆はだッさま(母)よ わきざし飾らはお

とさま(父)よ 硯墨紙兄様よ 鏡手箱はあねさまよ 一切道具

は山寺にく

(6) あれみツさい みツさい 帆かけ船はつゝいた 船を誰か止

めだきん女郎アとめた きん女郎アとめだら ごしようになり

ませう

(7) 雀小雀 にシア(返)とこに田作る 柳の下さ田作る なーに

て水引く よしのずみで 水引く 稲何杷がりく 一東三杷

がりく 二東三杷がりく 牛につけ馬につけ 地藏堂(天

字の名の前をそろりくと 通ふたれば 犬アらんと吠ひて来

た 後ふり返して 見たれば きぬごろ(布片)一枚拾った 之

をどこて洗ふべ 洗場で洗ふべ これをどこて干すべ 干し場

で干すべ 外で干せば人は見べし 庭さ 干せば雞見べし 馬

屋干せば馬は見べし かと(水屋) さ干せば鳥は見べし 次郎

に着せれば太郎はにらむし 太郎に着せれば次郎はうらむし ゆ

うべ生れた 赤子にさせませう 赤衣裳着せて 赤い帯させて

中につけ馬につけ あつちの川さざんふり こツちの川さざん

ぶり ざツこさざらめを 蝦はねて こ、んだ こ、んだの女

郎は うツつい女郎と きたない女郎と 髪結ふて ずツぎけ

て 御寺参りに行たれば お寺の小僧は 一寸でひねツた な

して小僧ひねツた みめアあよいからひねツた みめよいたて

ひねッないて きしやれく

(未完)

* 未完と付記されているが、この続きは掲載されていない。

明治35・2 (4卷10号)

「研究実例」肥前小城地方童語及び童謡遊戯

(佐賀 星川 清成)

私が小城地方に来てから、その日数も立ちませんが、まゝ九ヶ月になります。其間に随分此地方の児童の状態などにも目をつけて居ますが、何をいふにも本職が別にあるのですからそう専門に掛る訳にも行きませんが、平生聞きつけた所を一つか二つ書き集めて見たので、深く研究したとは申されませんが、其中誤が有つたら恕して貰ひたいです。

一体此地方は一体は武張て居る処で、随て人民の趣味好尚は至て平且と無骨なのです。物の慣例でも祭例でも皆武的になつて居るので、優美とか風雅とかには至て無頓着で衣食住共に「ラストック」に満足して居るのですから、其余は推して下さい。地勢は北方に山を控へて南方は平野有明の海に続いて、所謂佐賀の平野です。殊に小城は天山山脈を背負つて、山近く気候も佐賀市などよりはずつと寒いので、元は常陸の千葉が九州に下つて来て、当町も居城を構へて専ら武を励ましたそうで、それから今以て武の方は中々盛だといふ尤も千葉家の後は鍋島の支藩となつて居るです閑話休題。

童児の遊戯に就て申さうなら、これも至つて簡単で無趣味でこれで慰みになるかと思はれる位なです。先づ学齡未滿及び小学時代の児童の遊戯は、男女に分ければ左のやうです。但し学校遊戯の部は何処も同じですから省きます。一体佐賀でも田舎ですけれどそゝ大差はない。

男		女	
獨樂廻シ	玩具	東京邊ニテ	鞠ツキ
掛獨樂	玩具	ノ稱	空氣手鞠 玩具
トーパーダ揚ケ		イカノホリ	毛糸細工
竹馬		(鳳)ノ方言	人形遊ヒ
地雷火	玩具	トーパーダ	オ茶ゴト
紙銃砲	玩具	遠旗ノ意	ツク羽子
竹銃砲	玩具	カ	猫目撥キ
移シ繪	玩具	蜻蛉ツリ	ヘンボ採リ
ヒエツチ	玩具	ヘンボホサ	砂盛り遊ヒ
人形起シ		んほの方	全上
ムクロ突	ムクロ子ノ玉	言の由なり	全上
花火線香	チハダギキアツルン		全上
隠レンボ		オ茶ゴト	全上
草隠隠シ		いはゆる	全上
鬼チヤン兒トロ		マンゴト	全上
子ンボ打チ	杖ウチム		全上
花ダン(菊ノ花)	方法等シ		全上
輪廻シ			全上
砂盛り遊ヒ	ズナハ	ズナハ東京邊にて	全上
罈取り		砂の方言	全上
釣魚			全上
魚スキ			全上
虫取り(秋ノ虫ナリ)			全上
蟻狩リ			全上
盆綱引			全上
矢射			全上
伊呂波ナミ(甚だ稀ナリ)			全上(甚だ稀)
歌かるた(全上)			全上(全上)

先づこんなもので、殊に盆綱引は八月に行はれるので、力量を励ます為でしよう。これも古からの例なそうで、また矢を射ることも正月の例となつてゐるとのことだ。これは天に向て矢を放つので、その時こんなことをいふ。これも武を励した遺風だらう。

ノンボイ、シャングイ、我カヨカ処へ、オチローシャングイ。

そゝして手鞠歌なども至て乾燥無味だ。次に出しておく。

一―二―三―四―五ツ六―七―八―九―十―

ヒーフクレタオ梅サン(柳町ノヤヘイサンコシヤバントマランガ) ネーマイ(鷹取) マンジユ

クハセツバイ(ウヱハスル)

のやうなもので、実に御覽の通りです、

中学生位になりますと、撃剣水泳囲碁将棋(小戎モコレハ小學生モ) 尺八笛鳥魚獵

として、歌加留多などは女のする事として顧みない。それで学校遊

戯でも、ローンテニスよりはベースボール競漕短艇などの方です。

先づ遊戯部は是までといたして、次に童謡を一ツ二ツあげましょう。

ト―バ揚げの時

ドーバタアガレく。キタカゼ、フケ、。イトトルデツチ、アシ

モトチユ―テモ、ヤッコサンハ 尻ハカンザラシ。

月をみて

オ月様く、ナシテ星デツサツサン、(星出) 十五夜サンカラ、ニク

バレボーテ、ソコデホ―シデツサツサン

○

カラジヨ―く、ナアシテゲビアオトサンカ、ヒーダルサノコート
コト、ヒータカコンナタクリヤイ、クアックレバ、アーシガツメタ
カタン、ツメタカコンナ、アーブイヤイ、アブレバアツカタン、
ア―ツカコンナ、ヒザイヤイ、ヒーザレバ、シリツツク、タテバア

メアツク、グットイウテシンダ。

○

コーヤヘンジヘンジ(敷柱ナリ) タコーアガレバ、ハチカラサ、ル、
ヒターオイレバ(バナリ) ヒトカラトラル、。(之を幾編もくりかへす
なり)

蜜狩のうた

ホ―タルケンジヨ、ターケンジヨ、ターノミヅノムツカ、キドノミ

ゾノムツカ、ナカンカハノミヅノムヲ。

手鞠ウタ

コトヤチ―ウヲ、ニガ二十一(ニシユ)、三、三十(シユ)で四ガ四十(シシユ)五ガ五十(ゴ)六

六十(ジュ)デ七十(シユ)デ八十(シユ)デ九十(シユ)チヨ―ド百ツイタコ。

子守など謡ふ謡

ヒツチヨコく、ハーチノス、ハーチャヤメアスツクリヤ、ス―ハ

ツクラズ、ヨメゴミニ、ヨメゴハドンナヨメゴヤン、ヘンツケカネ

ツケヨカヨメゴ。

お月様

オ月サンナイクツ、十三七、七ノ年カラ京ニ上セテ学問サシタ、七

ドン八トソイフテケンクワーシヤンナ浮立(ウツタ)ノクツケンマ、タキヤ

イオリヤマ、スツカンミ。

二人手を組みて遊ぶ時

ヨトノカハセノハナミヅグルマ、サイくヨ―イ、サイくドツコ

イサイミミシカケガヨケレバオノツトマワルサイミミ

○

ケフハヒノヨカ、ウサギノコトリ、オヤガシンダラ子ハダレクリヨ
カ、オレ子ハクイヤイノ(興ナリ)

手まりうた

カンノカゴジヤノボランカ、ノボローシタクハハシタレドモ、アンマリ亀女ガ啼クホドニ、亀女ナカスナトサンヤロト、トサンノミヤゲナニナニジヤ■一ニ香箱ニテ鏡ニテ薩摩ノイダコーテ■板屋葺シテ門タテ、門ノゲルリスギサイテ(刺)杉ノオハネデ香タイテ香ノケブリハ西東■ニシトヒীগシトナク鳥ハガシカスシシヨカコーノトリカ■サイテミタレバチヨセンドリ(繪)チヨセントリノア二ヨサンタチャカカミーケンズリ、ケーソーシテ■ソーロリソツトメアーラレタ■オド(已)モナニキテメアーローカ■サ、色ノベンペンキテモローモイロノオビシテソーロリソツトメアーラレタ

鬼しゃん子とろ

オニシヤン兎トロニカタランモンナアソーギアーホーボシカツラノホーフノ手ボヒラヒテスツポンノ

この通りそれもいろ／＼の緩急の節はあるけれども、そのアクセントは一々つけると面倒でならないから省いた。その中に含つてゐる智的心的音調的事も一々述べたいけれどそれはなほ悉く集めて後にしやう。何処の児守唄やまりうたなども、無意味なものであるのが、普通であるが、その内やミ意味の通じるものもある。併し此等のうたどもは只今では鉄道唱歌や学校での唱歌に圧倒せられてゐる姿だが、またこれらの歌がだん／＼地方の人の記憶から逸せらるるのも遺憾だ。これらの研究も中々軽忽に附しがたい点がある。大に其地方の人民の智的歴史の参考になるのだから心ある人は諸方面からよく／＼考へて貰いたい。次に童謡であるがこれは次に譲らう。

* 「手まりうた」中の「チヨセンドリ」に付された「鶴鶴」と

いう割注は誤りと思われる。佐賀平野から筑紫平野に分布

し、「カチガラス」「チヨウセンカラス」「高麗カラス」と呼ばれる「カササギ(鶺鴒)」を指すのではなからうか。

明治35・2(4巻10号)

「研究実例」○小児の毬歌

(福島県伊達郡 佐藤 定治)

此頃一月の休暇中諸所にて少女の毬つきを見たり。其歌の俗調中に自然と修身上日常自己の行為に顕はれたる事を、修飾を加へず、唯有の儘に口に委せて唱ふる所は面白し。それを左に記したり。之は年中数へ歌其間の行事生活状態等を察することが出来る。彼の児女等ハ之を無意識に繰り返して居るが自然と社会の中にて感化を受けると云ふことは悟らる。宗教心と美に対する感等が微か見えて居る。之を遊戯の教材に採り意味を推し広めて教へたら少しは益があるだらうと思つて録して見た。観者諒せよ。

正月ツトセ 障子あければ万歳もん鼓の音やら歌の声ノ

二月ツトセ 入道坊主も寺詣あすは彼岸の御中日ノ

三月ツトセ 桜花よりお雛様飾で見るのは内裏様ノ

四月ツトセ 死んで又来るお釈迦様 笏柄杓で水を汲むノ

五月ツトセ ごん／＼はやりの前掛けをお正月来るとて取つて置

たノ

ろくに田の草も取りもせず前掛ないととお腹出すノ

七月ツトセ 質屋の番頭さんお忙し質を出したり流したりノ

八月ツトセ 蜂に刺されて泣てくる何かお葉あるまいかノ

九月ツトセ 草の中には菊があるあれは見事に咲て居るノ

十月ツトセ 重箱しよつて何処にゆくあれは娘のおび買ひにノ

十一月ツトセ 市いちに出るのは巨だんな那樣きぬが高くて景けい氣きよいく
十二月ツトセ にこく顔かほして働はたらけば福ふくが来るぞい皆みなさんよく

明治35・3 (5卷1号)

〔研究实例〕○越後越南地方の児童俚語の研究

(越後 平賀 泰三郎)

当地方俗間に伝はりて、児童等の唱ふる歌詞は、何れの時代より始まりたるかは、明かならざれども、其の歌詞を熟読するに、多くは俳諧発句の盛なりし、元禄頃よりこのかたの作なりと思はれぬ。それは現存の老翁に問ふに、吾等の幼きとき唱へしも、今子供達の唱ふるも、かはるふしなしと。余つらくおもふに、児童等がかく喜んで、其の季節くの歌を唱へて、余念なく遊び戯むる、事の無邪気なるは、一つに其の歌詞の平易にして、口語とや、一致なせるの効ならんと思ひつるにより、これ等の歌詞を集め見んとて、児童の唱ふるまゝを直に書きつるに、其の詞に猥褻なるものあり、野卑なるものあり。又は方言の世に知られざるも、多く交りたるにより、これを訂正し、唱歌にはた遊戯に利用したらんには、大に益するところあらめとおもひつれど、筆拙うして矯むるの力乏しきにより、貴紙の余白を汚し、読者諸君のまにく筆加へられ聊たりとも用ゐるところあらんことを希望するものなり。

蛍を捕ふるとき唱ふる

一 ほつたろーこい、かんねんこい、そつちの水はにがいぞ、こつちの水は甘いぞ、こいこいこがねの水くれる。

月を見て唱ふる

一 のーのーさおとつき、おまひはいくつ、十三と七つ、まだ年やわ

かいく。

鳥の時に帰るを見て唱ふる

一 からすくがながらす、姥が家はやけた、早くいつて水かけろく。

一 からすくがながらす、さきのからすはあとになれ、あとの鳥は先になれ。

雪のふり初めしを見て

一 雪こんこんや、霰こんこんや、寺の前の、さんしゆーの木に下に、一 升五合たまつたく。

雪を錠形に踏み分け其の中を通りつ、

一 京へばんば、ひなかへばんば、京のひなかの、猿がばんばへまはれく。

雪の凍みたる上を渡りつ、

一 しんばいこんばい、な、こんばい、な、が畑の道の端の、竹の俣のおしよーぶとんの、とーふくい、とーふくい。

雪の凍みたる上を櫓にて物を曳きつ、

一 こればかばかのだいいちは、はなのみやこへ、のりだした、ぢいさも、ばアさもでてみる、やあよーいとんぼー。

年越になりたるを喜びて

一 正月の神様は、どこまでござつた、蟹沢山の腰まで、ゆづりはを、腰にさして、まよくござつたござつた。

一年の神様といふ人は、なに持つてござる、ゆづりはを腰にさし、松つえてござるく。

〔研究実例〕○陸中盛岡地方兒童語

人倫

(上関 とみ子)

オドツアン(父) オガサン(母) オヂサン(祖父) オバサン(祖母)
 オアニサン(兄) アネサン(姉) オンツアン(伯父) ウバサン(伯母) ホガノト(他) オレ(自分) オボコ(小供) アガボ(赤兒)

食物

チツチ(乳) オマンマ(飯) オツゲ(汁) オゴ、(香物) ゴツゴ(魚) ウマイコ(菓子) ニギく(握飯) アエコ(水) ペロく(麴類) バツバ(煙草) ザツコ(小魚)

衣類

ボ、(着物) テンテ(手拭)

器財

ゼンゼ(錢) チョくくコ(草履) ピイく(笛) ドンド(太鼓)
 ニョくサン(人形) ガラく(車)

身体

マナグ、マ、グ(眼) テ、(手)

動作

アギく(食事) アエボ(歩行) ノタク(趨フ) ネンネコ(寝)
 オチン(坐) タツタ(立ツ) オヂギ(礼) バチャく(洗濯) ヤギく(焼く) ガボンズ(水中ニ石ヲ投グル) バオく(飛ブ)
 テョーダイ(請求) イロくカク(字ヲ習フ) ガツキ(物ヲ割ル)
 バアバ(負フコト) ガランく(鈴) チカル(叱ル)

形容

チャヤーヤ(美麗) バ、(汚イ) イ、ト(賢) バカコ(愚カ) ペアコ(少シ) エツペア(多ク) オツカナイ(怖イ) コワイ(疲)

自然

アチ、(火) ゴロく(雷) トーデヤサン(月) ボーく(燈火) アツチャ(他所) オヒサン(日) トット(鳥) ケケコー(鶏) カラく(鳥) ニヤゴ(猫) ワンく(犬) チ、メコ(雀)
 モンコ(妖怪) ベコ、(牛) チユく(鼠)

補遺

ニョくサン、アツテヤサン(神様) イロく(文字) エツコ(絵) ヤンタ(否ム詞) モ、コ(柿桃類)

童謡

カールスく、ウンナ(オマエノ意) 行ク道サ、オンドガ立テ(塔ノ意) 行カレヌ程ニバー(祖母) モサ寄りテアツキマ、(赤飯) ダベデガーくトトンデ行ケ。

雁ノトブラ見テ

カンくヤスムロー、カギニナーレ、竿ニナーレ。

蛭狩リニ行キテ

ホーダロサンくオイトシャく夜ハピカく高提灯昼ハ草場ノ露ノカケ。

ホーダロサンくアツチノ水ハウマクナイコツチノ水ガウマイヨ

月ヲ見テ

トーデヤサンく、アガイボ、クナンセ(下サイ) シンボ、(白衣) クナンセ。

凧ヲ揚グルトキ

風サン、チョト吹イテクナセ、アスノ晩カラ米買テモシ、雪降りヲ眺メテ

雪モコンコ、霰モコンコ、コンコノ御寺サアツギバトハ止マツテ、アツギアスミ、(氷フルコト)豆ハコロ、コーロンダ。

男女ノ小供ガ遊ベルヲ他ノ兒童ガ冷評シテ

オトコトオナゴト、テヨーセンコ、アンマリテヨーシテ、ナガセンナ、

子供ヲ教フル俗語

御飯ヲコボセバザドニナル(盲ノコト)

立チツ、食事スレバスネコタンボニナル。(脛ガ太クナル意)

蠅ト トヲ食スレバ死ヌル。

親ヲニラメバカレイニナル。(魚ノ名)(後ニ眼ガ付クノ意)

夜ニ爪ヲトレバ夜話スル病人ガ出ル。

爪ヲ火ニクベレバトスニナル。(癩病ノコト)

夜ニホーズキヲナラセバ蛇ガ来ル。

昼昔話ヲスレバ鼠ガ笑フ。

明治35・5(5卷3号)

「研究実例」○兒童と正月

(安芸仁方 能島 正夫)

茲に正月と云ふのは無論旧正月の事であつて、此旧暦正月に於ける社界の感化が兒童の精神に如何なる影響を与へるか、社界の出来事が、どれ丈け、兒童の精神に印象するか。次で此正月なるものは果たして兒童の爲に有益なものか。又有害な事があるかに就て余の研究した一端を記述しようと思ふ。

旧正月の社界

先づ旧正月の社界の出来事乃至習慣の一端を記すと云ふと、殆ど我那一般と違ふ事もあるまい。即ち三日の間業を休んで、雑煮餅に腹をふくらせ屠蘇を飲んでホロ酔ひきげんに遊ぶので、其遊び様も花かるた乃至八々の類である。

兒童の目に触れた道徳的の行為

尋常科第二学年の兒童四十二人の目に触れた道徳的の行為を記述して見よう。

家の壁に落書せる

四、

ちやうじとてトバクに
類する遊戯せるを見し

八、

畑の中をふみあるける

二、

孝行な子供

一、

自慢せる

三、

遊戯のじやませる

二、

けんくわせる

四、

石を道の真中における

三、

人に悪口せる

五、

通路のじやませる

二、

なしと云ふもの

八、

之を見ると大概兒童的の行為であるけれども、又大人の行為のあしきを目にせるものも亦三分の一に垂んとするのである。吁正月は兒童に悪感化を及ぼすに止まるのであらふか。此外にも兒童に悪感化を及ぼすの行為が、公然社会に行はれて、兒童の前進をしてあやまらしむるものは意外に多いのである。即ち楼上の酒宴、男女の混交、或はフザケ遊び等は其一例である。けれども之を兒童はあやしまない。不道徳的の行為とは思はないのである。それで前の表に漏れて居るのであるが、併し此等の悪行為を兒童が悪行と思つて居ない丈け、それ丈け兒童に悪感化を及ぼし、兒童が成長した後には、自らは等の行為をなして敢てあやしまないに至るのであらう。ア、茲に至て僕は正月全廢論を唱へざるを得ないのである。

児童の遊戯

児童が此正月を如何に費して居るかを見ると。

尋、二、男 四十二人、の中

まり遊び 二、 炬燵ではなし

とりこ 二、 独楽 一四、

山遊び 五、 兵事遊び 四、

船遊び 一、 鬼ごと 二、

唱歌うたひてあるける 三、 羽子 一、

たわむれに餅つきたる 二、 輪をまわしたる 四、

呼児童はどこ迄も神聖にどこまでも快活に遊んで居るのである。余は之を見て聊か胸のすくのを覚えた。

児童と童謡

一、正月がござった、おたんや(連夜)がござった、てんまる(てまり)つくく〜ござった。

二、正月さんがござった、ゆづりはの峠を、弓を持って矢を持って。

児童の正月に対する観念

一、四歳の児童に「正月が来たら年を取ると云ふが年とはどんなものか」と云へば「餅の事だ」と答ふ。

二、又「何故年を取るか」と云へば、「早く大きくなりたいから」と云う。

三、四歳三ヶ月の児童に「正月がどこへ来たのか」と云へば、「アソこに居る」として万歳を指せり。(万歳として太鼓をたたき踊り来る)

四、八歳十ヶ月の児童に「正月が来たがお前等はどう考へるか」と云ひしに、「今年も勉強せうと思ひます」と答へた。

明治35・9 (5卷7号)

〔紹介〕○子守歌

(丹後 朝輝 記太留)

(一)ねんやねんく〜ねたこはかはい

おきてなくこはつらくい

(二)なんぼないてもこのこはかはい

わしのおめしのたねじやもの

(三)ねんねしよといふてねるよなこなら

もりもいろまいおやもりで

(四)ないてくれなよなかしくれな

なげばながたつものな

(五)もりじやく〜とおくさんなげに

もりがありやくそがそだつ

(六)あのこよいこじやわしみてわろた

わしもみてやろわろてやろ

(七)あのこよいこじやさいのこにおしや

まちにやりたいきやうのまちに

(八)ねんねなされよおやすみなされ

あすはおまいのたんじよにち

(九)たんじよにちにはまめのままたいで

(十)このこいちだいまめなよに

なくくなげくなえんならりやつりよに

えんのないこがつれりやりよか

右は丹後大江山麓地方の子守の人口に膾炙せるもの、中卑猥なる者を除き其一斑を記せるのみ御参考ともならば幸甚

〔紹介〕○越後の童謡

年の立ちたるを喜びて

（越後 平賀 泰三郎）

一 正月はよいもんだ、紅のよーなと、くつて、油のよーな酒をのみ、雪のよーなめしをくつて、こゝろもちよく遊ぶく。

一 御正月は、松竹しめかざり、年始の御祝儀と年玉なげこんだ、さいぞーは、そーいつてまじめ顔、万歳は、おちやらかほんのまじめ顔して、とつびが、ぴい〜。

年の立ちしを祝ふて

一 大黒様といふ人は、一に俵をふりまへて、二ににつこり笑ふて、三に酒をつくりて、四ツに世の中よいよーに、五ツに泉のわくよーに、六ツにもみじよーそくさいに、七ツになにごとないよーに、八ツに屋敷を平らげて、九ツこくぐらおつたつて、十にとつくり治めたり。

正月に雪の楼にて鳥追の歌

一 雪のどーの鳥追は、どこからおつてきた、支那の国から、おつてきた、なんでもつておつてきた、せつちん口の芝のいておつてきた、しばのとりも、かばのとりも、たちやがりや、ほーい〜。

一 あいらが鳥追だ、だいろーどんも鳥おひだ、さらばちつとも追ひましよー、朝鳥も夜鳥も、頭きつて塩つけて、こんだいろーへ、ひろいこんで、佐渡が鳥のをばこ、ひその下へ、ほーいほーい。をどらがせどの、わせ田の稲を、なんどりがまくらつた、すゞめ鳥がまくらつた、すゞめつばどりや、たちやがりや、ほーい〜。

一 北から南へ、とぶとりは、羽が十六身が一ツ、おつてくりやれ、

田の神、田の神のとり追は、何十ながへりおはふに、すゞめつばどり、たちやがりや、ほーい〜。

一 おらが鳥は、ぎんしよのからす。西の入にをりて、たを〜舞ふて、ふつけを拾ふて、をばこらなんだ、ふつけといふもんだ、一チまき、二まき、三まき、さくら、五葉松、やなき、柳のもとへ、かいたりふみよ、たれたれよましよー、源太によましよー、源太の名は、栗鳥、稗鳥、たちやがりや、ほーい〜。

正月戯れに唱ふる歌

一 京から狐が三匹くだり、あとの狐はもの知らず、先のきつねもものしらず、中のきつねがものしりて、田ン保へおりて、穂を拾ふ、一トほ拾ふてや、ぶつかつね、二たほひろふてや、ぶつかつね、三ほめに日がくれて、こんやどこへ泊ろー、きよーどんの木の下に、た、み十枚すきならべ、うすべり十枚すきならべ、姉さござれ、妹さもござれ、おばさの腹へ、子がいたそーで、ぎやく〜となきやる、女ナ子はならふみつぶせ、男の子ならたすける、その子の名は、八幡大神とまふします、八幡大神は、馬を何匹つなえだ、四十六匹つないだ、草を何ンば刈りこんだ、草の中の、だいろーが、油屋へよばれて、油かすもろーて、火棚へをけばす、けるし、戸棚へをけばかぶれるし、父の枕元にやつたれば、いたちが、かしらをはひつぱりて、あいたちぢぢ〜ぼー、ぢぢ〜の寺へ、雀が一羽とまつて、小豆かゆをまくらつた。

手鞠歌

一 鶯や、うぐひすや、都へのぼるとき、梅の木小枝に昼寝して、夕べにござつた花嫁が、筵三枚ござ三枚、合せて見たれば六間屏風、六間屏風をたてまわし、こそらく〜と、なきしやんす、何がくや

しふてなきやんす。

一 おらがいとこの千松は、七ツ八ツから金山へ、一年待てどもまだこなへ、二年までもまだこなへ、三年三月状がきた、誰こへとの状がきた、おつまにこへと状がきた、おつまはこのたびやれまへ、着物の一ツも買ひきせて、帯の一ト筋買ひやして、前のお寺を参らして、あゝら、おつまが、着物に血がついた、ちでもないもの、はなぢでないもの、夕べけしよーしたべにじやもの。

一 うけとつた受取つた、さんごの盃いもうけとつた、これからどのたへさしましよーか、おらがまいの、ほーしゆー造りのこんなよれんの、みぎりさまへさしましよーか、みぎりさまは、ごせん時でござんすまして、さしましよーか、ごせんすましてさしましよーか。
一 イニウが三四で、五ツ六が七よーで、十た十一が十二、十三十四が六、おてはまおく二十、おく三ッさぶ六、おくしが四十九で、十六は六十で、二十七は七十で、二十八が八十で、二十九が九十で、ちよーど千ついたんべ。

一 まんさくさアま、くわんとへたちやがれ、先く、甘茶で、秋までまユちやがれ、れんげのお花が咲たとて、ちれやせの、おせんがあきやま、今朝こえみれば、なみだもかゝる、おしやかもかゝる、それをおがめば、しゆーすのをがされる、南無釈迦おにゆーらい出ておがめ。

一 あらたかわしゆーてんが女房、人はよれとは、よれとはいわぬ、あすの生れか、あきやの生れか、てゝににたな、りやりよーにさあさせ、母ににたなら、けいせにさアさせ、けいせさしたとて、ろくなけいせさアさぬ、いちのにさんぼあの、やすりやすり。

一 向ふ原じや、ぜんまうりく、わらびおりく、これのよめ、か

むーすめ、むすもなあらば、おきよーへのほせて、おきよーおびを、むすびさアげて、いなかおびをたアすきに。

一 これのごてさま、なにをまくらに、扇箱や、硯箱や、なんずかアんずまくらに。
(未完)

明35・11(5卷9号)

〔紹介〕○越後の童謡

(越後 平賀 泰三郎)

一 こんこのりんこで、よいくりんこで、もーはくさいなり、きりはくさいなり、もーりのおくまが、おくさんさアまへ、かりわだをさげが、けさよてかみを、ほどへてとゞへて、こまゝらよーがしな、こーがしな、こーが一千さアきの、あつらいものを、あつべて見たれば、およしがまいの、ぼたんばアな、ちれておちるか、つほみでおちるか、せんといへ、せゝながせめたじ、およせめた、さかもとさかして、せんまつが女房あげたしな、そめたしな。

一 そめたわたほーしの、のりがさね、ヤアくし観音、つかまつる、こゝはよしはら、たかさのこじろ、こまかにぎざんて、せつせとをとして、せんぼのいのちを、かせにかアけて、ちやらぼんからぼん、ちよーど三三ちやーかせました。

一 下へさがれば、酒屋がござる、酒や一番だてしよじやないか、五両で帯買ふて、三両でくけて、くけめくけめと口紅さして、おりめくくとおりくださいて、結びところへしよすのはかいて、たてば芍薬、坐れば牡丹、歩む姿は柳のごとく、あまりお松が高評判で、江戸のおびやへ、よびよせらりやーかお松、おらがかゝさま、いなことおしやる、しんしやーよいとて、世が渡られよーかおま

つ、きりやーがよいとて、世が渡られよーかおまつ、えんがきれたら、出てごーざれ、えんがきれたらでてごーざれ

一 ことらアさま、ことらアさま、だいいなむすめを、やるときに、けいこーのざしきへ、ならばして、木綿三反、しぜごせん、なますさら、さらさけ三びよー、こいの、よいちやを四十四十九、こいのわりろやを四十四十九、それでたらば、出てごおざれ、それでたらぬば出てごおざれ。

一 正直に金がる、たいこやつゝみはしめてなる、女郎屋のにかいでは、三味がる、おちよゆーしのかはりにお手がなる、むすめはそろく嫁となる、ひでやたんすは、おもくなる、ほるればほる、ほどふかくなる、きよひめ蛇となる、さよひめ石となる。

一 一ツトセイ、人を見をろす師直が、かほよにれんほいひかけた。二ツトセイ、ふかあみがさのこもそーが、かたなの手のうち、ごむよゆーと。三ツトセイ、みれんふちよーの九太夫が、主人のたいやにたごさかな、はさもーなあ。四ツトセイ、一致のめんく一チ一ちに、山と川とのあひことば、あはそーかいな。五ツトセイ、あしのし、うたんと勘平が、ねらいすました二ツ玉、はなそーかいな。六ツトセイ、むごいつれないどーよくな、をやじさんを殺したは、たれじやいな、七ツトセイ、なんにも知らない妹に、ふたりのざいごー平右衛門が、かたろーかいな。八ツトセイ、山科こえても親子づれ、力弥と、小浪がいへなづけ。九ツトセイ、九ッはしごをとりだし。いやのおかるを二階から、おろそーかいな。十ツトセイ、とんとかたきをうちそろい主人の墓所へこのくびを、たむけふかいな。

子守歌

一 ぼーがもりは、どこへいつた、かんかち山へ、鳥追に、とつとにけられてないてきた。

一 ねんやこーや、ねつたらねづみに、ひかせよーし、おきたらおつかさんに、だかしょーし、ねんやこーや。

一 ねんねがもりは、どこへいつた、この山こえて、佐渡へいつた、佐渡の上産に、なにもろーた、どんくかぐらに、鈴もろーた、すゝのなかの、がらくを、御寺のこぞにくれてきた、お寺の御小僧は、なにして、たつたりねままつたり、茶を出して居た、ねんやこーや

一 ねんねがもりほど、つらいもりやない、内にやしかられ、子にや泣かれ、人にはいやじやといはれ、人の軒端で日をくらす。

一 守ほどらくのよーで、つらひのはなひ、朝はこばやくおこされて、旦那にしかられ、子になかれ、雨風ふへても宿はなし。

一 てんと、いたちと、ねこさいな、ねづみ、やつこらさで、もちつくくな、百にならども、なくこゑきかぬ、ねんねこ、ねいれやねいれや。

一 弟に生れた因果をききやれ、今年始めて子守にでたが、一ちにいちぢめらい、二にくまれて、三にさべられ、四にしかられ、五にごんごとなく子をおおせられ、六にろくだらことを言はれないで、七にしめしまで洗はせられて、八ッにはられて、からだかやせる、九にはぐいものときは、一度にくわさいで、十に殿様、はアてこれからは、子守はやめた、ねんやこーや

(終)
* 子守歌の三篇目「佐渡の上産」は「佐渡の土産」の誤植であらう。